

印度土人の家庭生活 (承前)

Y. I.

印度の婦人達の、今一ツの務と申しますは、午後になつて、友人や、知己の家を訪問することと、來客に應接することゝですが、一家の主婦は年若な娘を二三人も連れて、訪問に出掛けることもいたしますし、又來客のもてなしもいたします。随分、澤山、大きな御祭だの、宴會などをなしますが、モハメット教の感化がすくなくつて、印度人の從來の風習を變へなかつた地方では、プラミン其他高貴な種族の婦人達でも、面被をしたり、閨房にのみ引籠つたりする様なことは、いたしませんのみならず、男子の出席する宴會にも出ます唯男子と混同することはしないで普通は會場の一部分に婦人同志で集會し又男子達は、他の部分に

集ります。

宴會などに出席するには、婦人達は、若い娘や小供をも打つれて、皆大層立派に着飾て、それから持て居る丈の金玉寶石を輝やかしてまいますので、會主が賓客を慰めるために備へて居る音樂だの、詩歌の吟唱などをさゝましたり、或は其他種類の饗應をうけ、多くの友人知己や、その小供等と面白く愉快に談話するなど、凡べて男子とおなじはさの、愉快を得るのです。こゝにいふ宴會の外に又、婦人の間でお互同志が、もつと親密な會合をしばしば催しますが、之れには男子の出席を許しません、こゝ云ふ會では、子供達は、随意に遊びまはり婦人達は、お互に打ちとけて、會話をいたしますが、散會する前に、小さな銀の盆に紅粉を盛つて、持つて廻りますと、婦人達は各々少

しばかりづゝとつて額につけます。どういふ譯かと申しますと、これは、婦人の容貌を一層うつくしく見せるといふのですが、併し、たい小供と、

既婚の婦人のみがつけられるので、つまり、繁榮の印なのでございます。これがすみますと、茶菓が出ますが、砂糖漬や、果物や、砂糖木の樹汁などの御馳走なのです。そうして、若し庭園のある宅ならば、一同は庭に出で、逍遙することもわりますが家族のために、晚餐の用意をする時刻までには、各々歸宅いたします。

又婦人達は、一族の中で團體を作つて、此處彼處の神社佛閣に参詣いたしますが、印度では、到る處に神社佛閣がありますゆゑ、好きな場所を撰ぶ事が出来ます、これは丁度午後のよい散歩なのですが、時には、車に乗つて、うるはしい森林へ

行かまして、その森の中の寺院に詣で、花枝や、果實や、お賽銭などをさへげて歸ることもございます。

時々家族の一人が病氣に罹りますとか、或る娘が悪魔に取りつかれたと妄想するときは、遠方の神社に参詣いたします。こういう場合には、家族中から出られる丈澤山の人數が、この娘に附添うて、それから、一人の信頼すべき親戚の男子に後見させて出掛けます。此旅は、四五日もかゝります、なせと申しますに其道中と申しますが、随分險惡で到底、徒歩せなければならぬ所もあるやうな國を越へて行きますのですから、道がなかく抄りませぬ、若し、牛車でまゐります場合には、一日のうち、一度は留まつて休息いたします、食物は辨當支度にして携へてゆき、それから、夜分

になりますと、御堂の様な中に泊るのですが、このお堂と申すのは、いく百せん年のその昔、この國の信心深い婦人達がこれらの神様の御利益のため、この神社に参詣する後々の順禮や、旅人の旅行をいく分か安樂になしたいと云ふ願望で、建立したのであります。それで、この旅行は難儀なことは、随分難儀ではありませうけれども、平生毎日／＼の同様な、單調な生活を離れて新奇な状態に遭遇し、何程か、心目を喜ばしめるのでございませうから凡ての旅人のためには、まことに結構な、面白い、そうして健全な経験でございませう。ですから、病人も次第に快よくなりはじめまして、一行がお宮に着いて、禮拜いたし、清淨にせられて、貢物を獻げ、神官が悪魔を追拂ふ頃には、もう、全く快癒いたします。そこで、この巡禮の

一行は、その念願を成就いたしましたして、喜んで歸途につきまますが、その家族では、この巡禮で以て、誓願を完ふし、過罪を贖つたことなるのでございませう。そうして、又この一小巡禮旅行は、そののちいつ／＼までも、事にふれ、折に臨んでは、持ち出される話の種となるのです。(つゞく)

時鳥ほとゝぎす迎あけにけり

玄關

和歌子

玄關は家のうちで、第一番に多くの人の目に觸るゝところとございませう。私はこれまで随分いろいろの玄關を見ました。

ある家のは、誠によく整頓して居りまして、拭掃除もよくゆきととき、只こゝでおとなふだけで